View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Okayama University Scientific Achievement Repository

われはデカルトの末裔 —— 煩悶せる哲学青年

山口　信夫

目次

Ⅰ．はじめに
　１．デカルトへの関心
　２．デカルト『方法序説』の翻訳
Ⅱ．桑木厳翼
　１．西洋思想の導入
　２．桑木厳翼によるデカルトの紹介
Ⅲ．出　隆
　１．悩める哲学青年
　２．読書の傾向
　３．出の実存的問題
　４．出の思想的出会い：綱島梁川、桑木厳翼、デカルト
　４—１．綱島梁川
　４—２．桑木厳翼とデカルト
　５．出の自己批判：独断論から批判主義へ
　６．デカルトの翻訳
Ⅳ．　結語
Ⅴ．年表
Ⅵ．文献

Ⅰ．はじめに

デカルトの末裔われは去(い)なむとす三十一文字を愛(は)しとは思へど [1]

昭和 17(1942)年、享年 33 歳、喘息の発作で早世した中島敦は死の近きを予感してか、洋の東西の文学と思想をむさぼるように吸収した。<デカルトの末裔われは>という叫びに近い肉声に、『山月記』の虎に変身した主人公李徴を重ね合わせることができるというのか。われわれは中島の文学

[1] 中島敦「歌稿その他　Miscellary」、『中島敦全集第二巻』、筑摩書房、1976 年、272 頁。

の中に首尾一貫したデカルト思想の理解を期待しているわけではない。そうではなく、哲学の専門家でも学生でもない人物のうちにデカルトとの出会いがあることに驚く。こうした事実は一人中島だけにとどまるものではない。哲学の専門家でない文学者、文系理系を問わずさまざまな領域の研究者がデカルトに言及する。さらに大学で哲学の授業を受けた者はおそらくデカルトについて学んだであろう。デカルトへの言及・参照は他の哲学者より多いのではないか。ハイデガーやカントではこうはいかないだろう。デカルトとその思想への近親性はどのように生じたのか、その背景にはどのような事情があるのだろうか。

<東西交流と文化の翻訳＞という課題に関して、デカルトのテキストの翻訳が日本においてどのような背景でなされたか、またどのように読み継がれてきたのかという問題を考察する。

1．デカルトへの関心

デカルトの『方法序説』は哲学の著名なテキストのうちでもよく読まれてきたものであろう。そのすぐれた内容に加えて、大部ではなく、少々長文ではあるが難しい表現や概念があまりないことがその理由と考えられる。『方法論』(『方法序説』)が明治 37 年に桑木厳翼によって翻訳されてから今日まで、13 種類の翻訳がこのテキストについてなされてきた。『方法序説』が一番多く日本語に翻訳された作品ではないとしても、多くの興味と関心を集めてきたことは確かである[2]。

こうしたデカルトへの関心について興味深いアンケートがある。2008 年 8 月に 12 巻＋別巻の刊行を終えた『哲学の歴史』(中央公論新社)は、その別巻で 151 名の哲学研究者(多くはこのシリーズの執筆者)に以下のようなアンケートを行った。

「質問 1 ◆これまでに最も感銘あるいは影響を受けた書物、または最も知的興奮を味わった書物を一点か二点挙げ、その理由をお書きください。哲学・思想書を優先的にお考えください。[3]」その結果は、デカルト『方法序説』6 票[4]、ハイデガー『存在と時間』6 票、プラトン『パイドン』4 票、ヘーゲル『精神現象学』4 票、カント『純粋理性批判』4 票、トマス『神学大全』4 票、スピノザ『エティカ』4 票で、哲学者順では、プラトン 14 票、デカルト 12 票、ヘーゲル 8 票、メルロー＝ポンティ 8 票、ハイデガー7 票、カント 7 票、ニーチェ 5 票であった。

デカルトとその思想、とくにその作品『方法序説』の影響は、現在専門の哲学研究者、文筆家の

---

[2]　プラトン『ソクラテスの弁明』、11（新國稔秧、北口裕康、納富信留、久保勉、田中美知太郎＋池田美恵、船木英哲、三嶋輝夫+田中享英、岡田正三、山本光雄、久保勉＋阿部次郎、木村鷹太郎）。
『饗宴』12（生田春月、山本光雄、久保勉、森進一、岡田正三、鈴木輝雄、多田廣子、朴一功、水先博明、久保勉+阿部次郎、向坂寛、中澤務）。
ハイデガー『存在と時間』、8（熊野純彦、高田珠樹、原佑+渡邊二郎、細谷貞雄、桑木務、松尾啓吉、寺島實仁、辻村公一）。
カント『純粋理性批判』、11（熊野純彦、中山元、有福孝岳、原佑、宇都宮芳明、天野貞祐、高峯一愚、篠田英雄、桝田啓三郎、上田光雄、安藤春雄）。(国会図書館蔵書検索による)

[3]　『哲学の歴史　別巻　哲学と哲学史』、中央公論社、2008 年、333-485 頁。

[4] わたし自身、執筆者でアンケートの依頼を受けていたが、返事を出し損なった。返事をしたとしたならば、デカルトの『方法序説』を挙げたと思うので、7 票としてもよい。

みならず、多く一般の読者にも及んでいるだろう。こうした状況の成立には、デカルトの思想の研究・紹介ばかりか、著作の翻訳が大きな役割を果たしてきた。まず、デカルトの著作の翻訳がどのような背景と経緯を経て行われたのかを検討し、さらにデカルトの思想の摂取と普及がどのような形をなしているかを探究する。

２．デカルト『方法序説』の翻訳

デカルトの *Discours de la Méthode* の日本語訳をその初版を年代順に示すならば以下のようになる。

(1) 桑木厳翼訳『方法論』。『デカルト全』冨山房（世界哲学文庫第一巻）明治 37（1904）年、所収。
(2) 出　隆訳『方法』。『デカルト・方法・省察・原理』、大村書店(哲学名著叢書)、大正 8(1919)年、所収。
(3) 牛山充訳『方法論』、越山堂(世界名著文庫)、大正 8(1919)年。
(4) 村松正俊訳『方法通説』。『世界大思想全集　7』、春秋社、昭和 3(1927)年、所収。
(5) 落合太郎訳『方法叙説』。『デカルト選集 第 1 巻』、創元社、昭和 14(1939)年、所収。
(6) 川田熊太郎編『デカルト篇（世界大思想家選集）』、第一書房、昭和 15(1940)年。
(7) 今泉三良訳『方法と道徳』、小峰書店、昭和 23(1948)年。
(8) 小場瀬卓三訳『方法序説』、日本評論社(世界古典文庫)、昭和 25(1950)年。
(9) 野田又夫訳『方法序説』。『世界文学大系 第 13 (デカルト・パスカル)』、筑摩書房、昭和 33(1958)年、所収。
(10) 三宅徳嘉・小松元訳『方法序説』、東西五月社、昭和 36(1961)年。（論文筆者未確認）
(11) 三宅徳嘉、小池健男共訳『方法序説』。『デカルト著作集 1』、白水社、昭和 48(1973)年、所収。
(12) 山田弘明訳『「方法序説」を読む：若きデカルトの生と思想』、世界思想社、平成 7(1995)年。
(13) 谷川多佳子訳『方法序説』、岩波書店(岩波文庫)、平成 9(1997)年。

三番目の牛山訳は、英訳からの重訳であり[5]、牛山が哲学研究者ではなく音楽研究家であり、再版されることがなかったことなどを考慮すれば、牛山個人が何故デカルトに関心を抱いたのかという点を除いて重要性に欠ける。残りの翻訳は、哲学研究者並びにフランス文学研究者の手になり、それぞれの特徴がある。桑木訳は日本での最初のデカルトの翻訳であり、出訳は本格的な翻訳の始まりという点で画期的である。この両者につづく翻訳も、内容と表現においてそれぞれすぐれたものがある。

---

5 *The discourse on method and metaphysical meditations* of René Descartes translated by Gertrude Burford　Rawling, Walter Scott [1---] The Scott library.

II. 桑木厳翼 明治 7(1874)年ー昭和 21(1946)年

1. 西洋思想の導入

デカルト哲学の翻訳は桑木厳翼によって明治 37 年に初めて行われるが、それが可能となるためには明治期における西洋思想の日本への導入が前提となる。明治期の西洋思想の摂取は、三段階を経て行われた。第一期は明治初年から明治 23 年までの啓蒙期であり、第二期は明治憲法が発布された明治 23 年から日露戦争開始の明治 37 年までのドイツ哲学の導入期、第三期はそれ以降の時期である。第一期では、西周をはじめ、中江兆民、加藤弘之らが哲学、倫理学、心理学などの翻訳、著述を行い、次世代では大西祝（はじめ)、井上円了、三宅雪嶺たちが哲学思想の普及に努めた。その対象となった思想家はベンサム、ミル、スペンサー、ルソー、モンテスキュー、コントなどで、自然科学では進化論が注目された。これらは政治的文明論的関心から選ばれたものが多く、理論哲学(純正哲学)は未だその対象とはなっていない。第二期では、明治 10 年に創立された東京大学を中心としてドイツ哲学の研究がなされた。第三期は、桑木厳翼や出隆が活躍する日露戦争（1904）以降である。明治期の西洋思想の導入をその思想内容からみると、二種類の系統に分類される。第一は「物質的、経済的、客観的、実際的、しかして功利的というような系統」で、第一期に盛んであった。第二は、「唯心的、超絶的、主観的、道徳的、宗教的、と言うような思想の系統」で、第二期以降になる。[6]

2. 桑木厳翼によるデカルトの紹介

デカルトのテキストを日本で初めて翻訳紹介したのは桑木厳翼である。旧金沢藩士の長男として明治 7 年、東京で生まれ、明治 26 年東京帝国大学文科大学哲学科に入学し、ケーベルや井上哲次郎に学び、明治 35 年、東大助教授、明治 39 年、京都帝国大学文科大学教授に就任。明治 40 年から 2 年間のドイツ留学を経て、大正 3 年、井上哲次郎の後任として東大教授となる。昭和 10 年、定年で東大退職後、昭和 21 年に死去する。

桑木厳翼は明治 37 年 4 月に＜世界哲学文庫＞第 1 巻『デカルト』を上梓する。『方法序説』を含むデカルトの著作の翻訳を刊行した彼の目的とはどのようなものであったか。「今や哲学史の良著次第に我国に出版せられんとす、而して顧みて各家の所説を其原型に従いて邦語に顕せるものを尋ぬれば、僅に指を屈するに止まる。然らば即ち、古今大家の著に就て、簡なるものは其全文を掲げ、長きものは其大綱を提げ、宛然(さながら)一巻の写生帖を現出せんとする、豈に無用不急の業ならんや。『世

6 井上哲次郎「明治哲学界の回顧」、『哲学思想』（現代日本思想体系 24）、筑摩書房、1965 年。桑木厳翼は「明治の哲学界」において、明治期の哲学を前期と後期それぞれ 2 期に分け、4 期とする。井上と異なるのは、井上が日露戦争（明治 37 年）を大きな節目とするのに対して、桑木は明治 25、6 年をそれとする。桑木は明治 25 、6 年を、ケーベルの東大就任、井上哲次郎の帰朝、哲学会の創設、「哲学雑誌」の発展など哲学研究が安定してきた時期と考えている。桑木厳翼『日本哲学の黎明期』、書肆心水、78-112 頁。

界哲学文庫』成る亦偶然に非ざるなり。[7]」

明治 37 年当時、すでにかなりの西洋哲学史の紹介は行われたが、各哲学者のテキストの翻訳は十分ではなく、わずかだという。事実、明治 19 年には、アルフレット・フーイエーの『理学沿革史』(哲学史)[8]上下が中江兆民の手で訳され、三宅雪嶺らが哲学館で哲学史の講義を行い、1901 年には偶然にも、ハイネ、クーノー・フィッシャー、ヴィンデルバントらの哲学史が翻訳され、さらに波多野精一の名著『西洋哲学史要』が出版されるに至った(「年表」参照)。一方で、哲学者たちのテキストの翻訳出版は、桑木の指摘のごとく未だ微々たるものである。具体的には明治 10 年、中江兆民によるミルの『功利主義』(『利学』)の漢訳がなされ、明治 15 年、同じく兆民による『民約訳解』、明治 16-17 年、兆民によるウエロン『美学(維氏)』、明治 36 年から松本亦太郎・木村鷹太郎訳『プラトーン全集』(ジョウェットの英訳 3 版による重訳)の刊行が開始しされた程度であった。哲学者のテキストの翻訳もその多くは政治哲学のものであった(「年表」参照)。桑木はこうした状況を踏まえ、哲学の古典的テキストの翻訳出版の必要性を痛感したのだろう。『デカルト』の<序>で、「粗々哲学史に通ぜる人をして益(ますます)深く諸家の真相を窺い、自ら攻究の料を得しめんとするものなり、而して劈頭(へきとう)デカルトを選べる所以のものは偶然にして自ら宜しきを得たるを覚ゆ。[9]」さらに、当時開戦したばかりの日露戦争に言及し、哲学研究者という自己の立場を弁明する。「北欧の冬営に蟄居して陣中よく哲学革新の瞑想に耽(ふけ)れる哲人の業、之を稽(かんが)ふるを、嗚呼豈に時に適はずとせんや。[10]」哲学史を学んだ者に一層深く哲学者のテキストに親しんでもらいたいとの意図でこの『世界哲学文庫』の企画は始められた。しかしこの叢書は『デカルト』を含め 3 巻で終了する。しかも『デカルト』以外の 2 巻は桑木の意図を満足させるものではなかった。明治 39 年に刊行された第二編の小林一郎著『プラトーン』は英訳独訳を参考にしたプラトンの理想国の解説と要約であり、明治 42 年の第三編、小林郁編『コムト』に至っては、ハリット・マルティノが自由に英訳し縮約したオーギュスト・コントの『実証哲学』の紹介にすぎない[11]。

この事態をよくわかっていた桑木自身、のちに出隆のデカルト『方法・省察・原理』の<序>に反省の弁を述べる。「私自身嘗て十数年の昔やゝ同様の企画を以て世界哲学文庫を編纂し、其初巻として同じくデカルトを撰んだことがあるから、その點に於て多少懐舊の観に堪えないものがある。私の計画は哲学者の傳記学説の大要を序説として其人の著作中準據となるべきものを翻訳することにあったが、然し事を以て遮られ、同様の計畫はただ私のデカルト一篇のみに於て現はれることに止まり、其他には他の哲学者に就てやや詳細なる抜抄を試みたものが二篇現れたるのみとなった。

7 桑木厳翼『デカルト』冨山房(世界哲学文庫第一巻)明治 37(1904)年、2 頁。
8 Fouillée, Alfred; *Histoire de la philosophie,* 2e éd. rev. et corr. C. Delagrave, 1879. 『中江兆民全集』4、5、6 巻、岩波書店、1984 年。
9 桑木厳翼『デカルト』冨山房(世界哲学文庫第一巻)明治 37(1904)年、2 頁。
10 同書、6 頁。
11 Mlle Martinaux, *The Positive Philosophy of Auguste Comte,* v.1.2. free translated and condensed by Harret Martineau, J.Chapaman, 1853, 1856、他諸版。

[12]」この二編とは先に述べたプラトーンとコントに関するものである。

では、桑木の翻訳はどのような特徴をもつのか。

彼が企画した『世界哲学文庫』の第一巻『デカルト』は三編（序説、伝記、著作）から構成される。第一編、第 1 章、第 1、2 節では、宗教と科学の中間に位置する哲学とその歴史においてデカルトの方法と計画を定位し、第 3 節＜学案＞では、デカルトの学説の概略を提示するために、『哲学原理』第 1 部の各項の表題部分だけを訳出する。第 2 章、第 1 節では、デカルトの思想を合理主義かつ自然主義と規定し、それに対立する自然主義かつ非合理主義（ギリシア原子論、デモクリトス、ガッサンディなど）、合理主義かつ非自然主義（カトリシズム）、非合理主義かつ非自然主義（非哲学）を示し、さらにデカルト哲学の主要項目（懐疑、思惟、推論、神、神の誠実、心身関係）を概略する。つづく第 2 節では、デカルト哲学に対する反論（形式論理、唯物論および感覚論など）が提示される。第 3 節では、1895 年、発見された新資料としての＜ブルマン[ビュルマン]との対話＞の一部が紹介される。

第二編では、デカルトの伝記が略述されたあと、第三編で『方法論』(『方法序説』) と『考察録』[13][『省察』]の翻訳が示される。「デカルトの著作の主要なるものは英独等に数種の翻訳あり。其他又デカルトに就て論せしもの少なからず、然れどもクーノー・フィッシャーの近世哲学史第一巻に記する所を以て最も確実にして能く要を得たりとなすべし。[14]」デカルトの学説の紹介、伝記さらに翻訳も、大いにクーノー・フィッシャーに依拠すると述べる。フィッシャーに従い参考文献を挙げる。また、1901 年に彼自身が翻訳した『キンデルバンド氏哲学史』においても、真の哲学史と称しうるものはクーノー･フィッシャーのものだと称賛し[15]、1936 年、第 9 回国際哲学大会での＜日本におけるデカルト哲学研究の現状＞という報告で、「著者はクーノー･フィッシャーの著作及びその他の哲学者より感銘を受け、デカルトを目して近代哲学の先駆的建設者となしている[16]」と自らのデカルト理解がフィッシャーに依存することを明言する。桑木は具体的に『方法序説』と『省察』をどのような版本に従って翻訳したのかを明記していない。また、彼がどの程度フランス語とラテン語を解していたのか[17]。

こうした事情は、出隆の『方法・省察・原理』での桑木の＜序＞で語られる。「語学の智識に富む出文学士が、羅甸語及び佛語の原本を基に其翻訳を試みられたことは、学術上の著作として宜を得

---

１２ 出隆訳『デカルト・方法・省察・原理』、大村書店、1919 年、「序」、1-2 頁。

１３ 『考察録』は、Meditationes の表題の訳であるが、この訳語はすでに中江兆民が『理学沿革史』(『中江著民全集』５、210 頁)で用いているのでそれを踏襲したものか。

１４ 桑木厳翼『デカルト』冨山房（世界哲学文庫第一巻）明治 37（1904）年、118 頁。

１５ 桑木厳翼訳『キンデルバンド哲学史綱要』、早稲田大学出版部、1901 年、1 頁。

１６ 桑木厳翼『日本哲学の黎明期』、書肆心水、2008 年、194-211 頁。

１７ 桑木がラテン語を解していないのは明らかだ。「黒白の物体には我が感覚する黒白の性ありと思ふが如き」(「第六省察」第 15 段) と桑木が訳している原文は、”in *albo* aut *viridi* sit eadem *albedo* aut *viriditas* quam sentio” (A.T.VII, p.82)で、<黒>ではなく<緑>である。桑木訳を当時の仏訳(1647 年)に依拠していると思われる。この点からも出隆の翻訳の重要性が伺える。

たものと言はねばならぬ。」出隆は大正 2(1913)年 9 月、東京帝国文科大学文学科に入学し言語学を専攻したが、翌年の 9 月、哲学科に転科した。奇しくもこの年、桑木は京都帝国大学から東大に戻り、桑木に学ぶことになる。出はラテン語を恩師田中秀央（ひでなか）（当時、東大講師）に、フランス語を畏友太宰施門（当時、第一高等学校教授、出は津山、太宰は倉敷出身）に学んでいる。このことからも、出の翻訳が本格的なものであることが推察される。

桑木は出の語学力を認めたうえで、翻訳の文体について言及する。「私の翻訳は全然文語体により、然も漢文調に勝つ時文[同時代の文章]であったが為に、多少簡潔なることを得たが、然し文章の為に制せられやや精密なる際限を離れた所がないとは言えなかった。今、出氏の翻訳を見るに、全然口語体にして毫も在来の文体上の約束に囚われず、忠実に原文を複写することに努めて居る。[18]」明治期の翻訳の進展を考える場合、文体も一つの主題となるであろう。広く言文一致運動の流れにあって、思想書の翻訳もこれに呼応している。明治 10 年、西周によるミルの『利学』、明治 15 年、中江兆民によるルソーの『民約訳解』の翻訳は漢文によるものであった。明治 37 年、桑木によるデカルトの翻訳は、未だ当時の文体であった漢文調の文語体であった。大正 8 年、出隆によるデカルトの翻訳は口語体でなされた。今日からみれば古いことば使いはあるが、十分に読書に堪えるものである。出の世代をして本格的な翻訳が可能となったといっていいだろう。事実、出の関係した大村書店、それに先行する岩波書店から、思想書の翻訳が大いになされる。

III. 出　隆　明治 25(1892)年－昭和 55(1980)年

1．悩める哲学青年

出隆はギリシア哲学の研究・翻訳で著名であり、昭和 26 年東大を辞して東京都知事選挙に出馬した経験のある実践的な哲学者である。アリストテレスの『形而上学』の翻訳者として知られる出は、決して初めからギリシア哲学を専攻したわけではない。彼がギリシア哲学を研究するようになったいきさつは、『出隆自伝』の冒頭に詳しく述べられる。卒業論文は「スピノザ哲学における認識の二元性」というもので、大学院では「近世認識論史」という主題で研究を続けた。ベイコン、ロックさらにドイツ哲学と進むうち、デカルトの翻訳の仕事が舞い込んできた。デカルトを翻訳すると、中世哲学の用語が出てきて、中世哲学の学習の必要を感じトマスの『神学大全』をかじりだした。するとアリストテレスが出てくる。アリストテレスを読むと、ソクラテス以前の哲学に出会う。そこで、ディールスの『断片集』(Diels, *Frangmente des Vorsokratiker*)を読む羽目になり、イギリス留学を経て本格的にギリシア研究を行うに至ったのである。[19]

出がデカルトの翻訳を行うようになったのは確かに偶然ではあるが、彼とデカルトの出会いには

１８　出隆訳『方法』。『デカルト・方法・省察・原理』、大正 8(1919)年、2 頁。
１９　出隆『出隆自伝』(『出隆著作集 7』)、勁草書房、1963 年、3－24 頁。

実存的必然があり、時代もまたデカルトを翻訳する環境にあったといえる。そうした経緯を考察してみたい。

出隆は明治 25(1892)年の 3 月 10 日、作州津山に生まれた。10 万石の松平家を藩主とし幕府側についた津山藩は、明治初年に維新政府に恭順の意を示すために鶴山城天守閣他を取り壊した。津山の「貧乏士族」の父は、明治初年の風雲に乗じて平沼兄弟、箕作兄弟のように東都への遊学の希望を果たせず、地元の田舎教師（のちに小学校校長）に甘んじた。出隆は数え七つで尋常小学校（日新校)、四年後鶴山高等小学校（通常四年制であるが、二年時終了で中学校に進学も可能であった）に進み、二年後県立津山中学校に入学した。長女、長男、次男の隆、弟二人の当時ではめずらしくない子沢山で、出隆の家は豊かとはいえなかった。そこで、叔父の出氏の養子になり中学校に通うことになる[20]。さらに岡山の六高、第二部(理系)乙類に入学(明治 42 年 9 月)したが、哲学の志望やみがたくも第一部(文系)乙類への転コースは制度的に認められず、一旦退学し(同年 11 月)、小学校の代用教員となり(同年 12 月)、翌年第一部乙類へ再入学することになる(明治 43 年 9 月)。こうした事情を記録したものが彼の『哲学青年の手記』である。

この手記は森卓夫という架空の人物に仮託されているが、出の 17、18 歳の手記である。『哲学青年の手記』は、六高受験前の明治 41 年から二年半ばかりの 13 冊の手記のうちから、六高受験前の 6 月 1 日から明治 43 年 3 月 17 日までと、それに明治 43(1910)年 3 月 21 日の兄の病死の記録を再録したものである（ただし、実兄の死は翌年の明治 44 年のことである[21]）。これはまさしく典型的な文学・哲学青年の記録であり、そこには進学に関する家族とくに養父との葛藤、自己の進路に関する心理的思想的苦悩、S子への恋愛感情の三つの問題が、旺盛な読書体験とともに記録されている。出隆は東大卒業の 2 年後、デカルトの翻訳『方法・省察・原理』を刊行することになる。その背景にいかなる経緯があったかという観点からこの手記の分析を行いたい。もちろん、出はデカルトの専門家になったわけではない。しかし六高で桑木厳翼のデカルト訳を通じてデカルトと出会い、また一方で自己の実存的問題を宗教思想家、綱島梁川を通して考えつづけたという経緯がある。それは、当時の哲学青年の典型を示す一編のドラマである。それ故に、彼のデカルトの翻訳には古典の翻訳紹介以上の感慨があったと思われる。

２．読書の傾向

中学三年の頃から実兄の影響でキリスト教会に出入りし聖書や宗教書を読むようになる。さらに紅葉、鏡花、一葉の文学に親しみ、キリスト教を排撃した加藤弘之の『吾国体と基督教』[22]に反発を覚える。四年には漱石の『我が輩は猫である』などを読み、新体詩を作り短編小説を書く文学少

２０ 出隆「小学校時代の思い出」、『哲学青年の手記(出著作集 6)』、勁草書房、1－13 頁。
２１ 出隆『出隆自伝(出隆著作集 7)』、勁草書房、1963 年、41 頁。
２２ 加藤弘之『吾国体と基督教』、金港堂, 明 40.8。

年であった[23]。六高受験(7 月 11 日から 14 日までの四日間)以前、出は文学青年とは言えてもいまだ哲学青年ではなかった。六高合格(7 月 24 日合格通知、25 日の岡山の新聞で二部に二番で合格との報道[7/24,25,pp35-36])のあとで安心したのか、思想関係の書籍に親しむ。実兄の愛読書、梁川の『病間録』[8/15,p.105]、『梁川書簡集』[8/18,p.107; 8/22,p.121]を読み、古本屋で入手した『社会主義入門』とラッド著『宗教哲学』[24]を読み、後者から仮定にのみ依存する科学に対する哲学の優位を学ぶ。「その根底を窮め、実存者を知るところの科学は科学ではない、哲学である。――実存者の存在を知らしめよ。」科学と宗教、その間に位置する哲学の関係に強い関心を懐く。「哲学よ！恋しき怖ろしき学科よ！…… 哲学の曙光！」[8/30,pp.131-133]と哲学への恋心を懐く。彼の哲学への関心は認識論的問題というより存在論的なもので、時代的状況、自分の家庭環境や恋愛などが関係していたと思われる。六高入学は一時的に出に希望を与える。

岡山に到着した翌日、早速古本屋文禄堂(岡山市小橋町)で「欲しそうな古本 7 冊、五円十銭、仲々費用を要す」[9/10,p.145]と記す一方で、理系への落胆失望が芽生えて、次第に絶望へと向かう[9/10,pp,145-146]。入学以降、出は文学書を全く読まないわけではないが、哲学、宗教関係の書籍を集中的に読む。それを枚挙する。『文芸と宗教』（加藤直士[9/10]p.146）、『樗牛全集第 4 巻』[9/17,p.153]、『時代と哲学』（桑木厳翼)[10/18,p171.]、『時代と哲学』、『性格と哲学』（桑木)[10/20,p.172]、『時代と哲学』、『東西思想の比較一斑』（高山樗牛）、「徹底と煩悶」(桑木『時代と哲学』)[10/24,pp.175-176]、『哲学汎論』（得能文）、『美的生活論』(高浜樗牛)[10/26,p.179]、『寸光録』(梁川、これは前日購入したもの[11/14-11/16],pp.210-212)、『病間録』(梁川)[11/17,p.215]、『大死生観』(加藤咄堂)[11/18,p.217]、『修養論』（咄堂）[11/18,p219]、『デカルト』(桑木)[11/27,p233]、三宅氏『宇宙』(三宅雪嶺)、『性格と哲学』(桑木)[11/28,p.236]、『鴎心録』（角田勤一郎）購入、『樗牛全集五巻』『梁川書簡集』[12/3,p244]、『哲学汎論』（藤井文学士）、樗牛『世界文明史』購入[12/4,p.242]、『プラトーン』(小林一郎）[12/17,p.270]、プラトン、デカルト、西洋哲学史([1/7,p.290])、『病窓雑記』、『西洋哲学史要』(波多野精一)、『近世美学』(高山樗牛)[明治 43 年 1 月中旬[p.306]、『近世美学』(高山樗牛)[2/25,p.308]、『哲学史』（大西祝）小説を売り購入[3/8,p312]。以上が『手記』に記された思想書である。

読書は哲学、宗教、文学関係のものが圧倒的で、当時の哲学青年の典型を示す。1903(明治 36)年 5 月 22 日に第一高等学校の藤村操が「巌頭之感」を書き残し、日光華厳の滝から投身自殺をした。このとき出はまだ 11 歳で、この事件を知っていただろうが、その衝撃は記されていない。阿部次郎の『三太郎日記』の出版は大正 3(1914)年で、この手記の時期を過ぎている。出の『哲学青

２３ 出隆『哲学青年の手記(出隆著作集 6)』、勁草書房、1963 年、18－24 頁。以下同書の引用は本文中に、日付と頁数で行う。
２４ ラッド 述『宗教哲学』、福音社、明治 25 年。

年の手記』[25]はちょうど藤村操の自殺と『三太郎日記』の中間に位置している。

明治 42 年 7 月 7 日、六高の受験に来岡した出には、この街は彼が期待したロンドンやパリの喧噪とはほど遠く、「なんの刺激も美もない小都会[26]」にすぎなかった。無事入学した六高だが、理系の授業に不満を懐く。「教授というのは——生徒の自覚と悩みとを鈍感にする蓄音機である。（ことに二部乙の百姓相手には碌な先生は来ない。）[27]」「ドロー<<製図のこと>>だ。代数の宿題だ、前置詞用法の暗唱だと、学課に追い立てられ、不満と畏怖に日を送り日は終る。そして寝る。これが一つの表側の鎖の環で、これが毎日続いて、その間中、心臓は躍りを止めない。その裏側に、もう一つの鎖が腹這い、のたうち廻っている。同じ灰色の煩悶、憤慨、冷笑、懐疑、呪詛、反省、愛恋、自失、厭世、憂愁、そして煩悶、懐疑。[28]」その結果、読書三昧にのめりこみ、文系への転科の願いも果たすことはできなかった。その間の読書は、文学書も読むがやはり哲学に収束する。綱島梁川の『書簡集』、『寸光録』、『回光録』、『病間録』、桑木厳翼の『時代と哲学』、『性格と哲学』、『デカルト』、高山樗牛の『世界文明史』、『美的生活』、大西祝の『哲学史』、三宅雪嶺の『宇宙』、小林一郎『プラトーン』などで、何度も借りだしている本もある。

とくに、注目するべきは、梁川と桑木への執着である。桑木からは<徹底と煩悶>という人生論的主題を学ぶ。また、桑木の『デカルト』からも多くを学んだ。「十一月二十七日。午後県庁前の記念図書館にゆき『デカルト』(世界哲学文庫第一編、桑木厳翼著、代価七十銭)を借り出して読む。[11/27,pp.223-235] 」哲学的読書は桑木の『デカルト』に収束すると言っていいであろう。何故なら、桑木から学んだ<徹底と煩悶＞もデカルトの読書も、出の実存的問題とさらには同時代的問題とに通底していたためである。この前々日、出は養父へのことわりなしに六高を退学していた。

一方で、出は綱島梁川に魅了される。梁川の学問的著述、『欧洲倫理思想史』、名著とされる『春秋倫理思想史』は手記には見えず、『病間記』、『回光録』、『病窓雑記』などのエッセーを何度も読んでいる。＜見神の実験＞で著名な梁川の宗教的思想は出の実存的問題と相まって、<懐疑の正路＞[12/6,p.249] を形成する。

３．出の実存的問題

出は叔父の家に養子に出された。隆は五人兄弟で、長姉、長男に次ぎ次男で更に二人の弟がいた。父は小学校の校長ではあるが、隆を大学まで生かせる経済的余裕がないために叔父の養子となった[29]。出の実父に対する心情、養父との関係が、進学の問題に大きな影を投げかけた。養父の心配は

---

２５ この『手記』の出版は、昭和 22（1947）年、彰考書院である。出はこれら日記を徳富蘆花に送り、意見を求めたが、「灰にするが可」という直筆と共に小包が届いたという。同書、明治 43 年 3 月 17 日、315 頁。しかし燃やすことなく、戦後まもなく出版した。

２６ 出隆『哲学青年の手記(出隆著作集 7)』、勁草書房、1963 年、68 頁。

２７ 同書、160 頁。

２８ 同所。

２９ 同書、7-8 頁。

最終的には、経済的なものであった。出は六高を受験するが、第二類乙を選んだ。理系でドイツ語選択である。入学（9 月）のそのあと 3 ヶ月足らず(11 月 25 日)で退学し、小学校の代用教員を経て、一年後第一類に再入学する。しかしここに至るまでに実父も巻き込んだ養父との葛藤があった。最初から第一類、即ち文系を選ばなかったのには、二つの理由が考えられる。文系に進んでそれでやっていける自身がなかったことに加え、養父への配慮が働いていたと思われる。「我が身は二部乙<<六高の理科・農科・薬学科志望者の組、これを卓夫は志願している>>の門に近づきながら心は、詩人たらんか、星学者たらんか、或いは哲人たる資質ありや否やと迷っている。迷える羊（ストレート・シープ）。[7/2,p.59]」出は受験の際、「出岡滞在中の養父が訪ねて来て、落第しそうなら、文部省の教員検定でも受けて見るがえい、大学を出ても碌に食えぬし、大学は年限が長うてこまる、と竹本の小父を相手に語っていた。[7/10,p.74] 」こうした養父の気持ちを知って、「父と母を人の倍もつ僕は、かえって実際には孤児のような者 [7/11, p.81]」と思い、「養父の手紙では落第を望んでいるもののようである」と養父への疑念がつのる。「昨夜、広島の講習から父帰宅。及第してよかったと一言だけ。[8/8,p.99]」

それでも、新しい生活を夢見ていた。「高等学校へ行くは新生涯に入る第一歩のような気がする。早くこの津山を去りたい。恋の悲しさから去りたい。[9/6,p.139]」この希望も数日にして幻滅に変わる。新学期の準備で教科書を購入するが「どれも殺風景な本ばかり。英法や独法の人の教科書を見ると羨ましい。[9/10,p146]」読書は次第に哲学中心となり授業に身が入らなくなる。余暇をどのように使っているかとの教師の質問に、「「ハイ・・・・・・文学です」と答えた。文学よりか哲学と言いたかった。文学はやめている。怖ろしかったので嘘をいった。[9/11,p.147]」10 月 6 日に養父が来岡し、「できるだけ節約せよのこと。[10/6,p.164]」その翌日から文系への転科を考え出し、10 月 7 日には転科の件を養父に訴えることを決意し、翌 10 月 8 日に津山にまず実家の兄に気持ちを打ち明け、兄の諒解を得る。翌 9 日、養父に訴えようとしたが不在で、10 月 10 日、「泣いた、心で。養家に赴き、絶望。泣きすがって頼むことのできない、かたくなで弱い哀れな我。・・・・・・自殺決行のはずのところが［友人に会い］救わる。否、妨害さる。[10/10,p.170]」諦めきれない出は養父宛に転科懇願状を書く。「哲理攻究を一生の仕事としたき故を詳記。[10/22,p.172]」「今朝、四間あまりの手紙が九銭の切手を貼られて養父の許に運ばれた。二日二晩かかって認（したた）められた懇願の書がポストにことりと落ちて心は茫然とした。[10/23,p173]」

津山に戻り転科の決意を養父に訴えた 10 月 10 日と、四間（約 7.2m）あまりの懇願状を書き送付した 10 月 23 日の間に、出は桑木の『時代と哲学』を読み哲学を一生の仕事と決意する。この嘆願を読んだ養父はハガキ(11 月 3 日)で出岡し相談する旨を告げる。更に 11 月 4 日に養父からの手紙で、養父に会うまでもなく退学独立の意志を固める。11 月 8 日、石関町金屋で晩の 6 時から 8 時まで牛鍋を囲み沈黙がちな交渉が行われる。養父が経済的困難を述べるのに対して「今後は腕一つでやって行きます」――「それもよかろう、やって見るがええ」。[11/9,p.201-202] 11 月 24 日に

退寮、翌 25 日に退学届けを出し、その後で養父に手紙、実父と兄にはハガキでそれを伝えた。退学したあと、11 月 27 日に県庁前の記念図書館で、桑木厳翼の『デカルト』を借り出し読んでいる（デカルトのテキストそのものを読むのはおそらくこれが初めてであろう)。出は内職に新聞記者を考え、それに奔走したが、結局 12 月に薄給の小学校の代用教員となる。翌明治 43 年 3 月に代用教員を辞職し、9 月に六高に再入学を果たした。意を決して代用教員をやめて、無事六高に入学できた経緯は、『哲学青年の手記』が 3 月 17 日で終わっているために明らかでない。しかし義兄(養父の息子)は「それほど哲学がしたいのなら、もう一度入学試験を受けさせてはどうか」と養父を説得してくれたのが決め手となった[30]。

出は授業以外で理系の書物を読んだ形跡がない。理系の書物の名は『哲学青年の手記』には一冊も登場しない。また、その授業には次第に出席しなくなる。血の出るような煩悶と悲観の後で意を決し、津山に行き養父に哲学を専攻したい旨を説得しようとするが、理解が得られず、自殺を望むほどの絶望を味わう(10/10)。10 月 22 日には 8 メートルになんなんとする嘆願状を養父に送り、養父との会見で経済的独立を宣言し、養父に相談もせず退学した。それほどまでに強く、哲学を学ぼうとした経緯とはどのようなものであったのか。それは出の、綱島梁川、桑木厳翼、さらにデカルトとの思想的出会いにあったといっていいだろう。

４．出の思想的出会い：綱島梁川、桑木厳翼、デカルト

４－１．綱島梁川(明治 6-40 年)

現在の岡山県有漢町出身の宗教思想家、綱島栄一郎はその号梁川を故郷の高梁川から得た。高梁教会で受洗し、小学校の助教を経て、東京専門学校に入学後、坪内逍遙の知遇を受ける。哲学を学ぶと同時に『早稲田文学』の編集にあたり、自らの信仰に煩悶と懐疑を経験するが、晩年有名な＜予が見神の実験＞を公表する。哲学においては東西の倫理思想の研究を行い、彼の宗教的確信の基盤とした。＜自我実現＞は結局＜神人合一＞において達せられると考え、イエス・キリストをそのモデル・典型とみた。彼がエルネスト・ルナンの『耶蘇伝』[31]を翻訳したのも、ルナンに思想的共鳴を感じてのことであろう。短い一生のうちに多くの著述を残し、それらは死後『梁川全集』(全 10 巻)にまとめられた。

出が哲学の名を知るのは、中学校の図書室にあった岡山出身の哲学者大西祝（操山）の全集からである。「大西博士の西洋哲学史は、わからんなりに本気で読んだように思うが、覚えているのは、デカルトの疑いと『我考う、故に我在り』の句だ。[32]」そのときはじめて、デカルトの名も知った

[30] 出隆『出隆自伝(出隆著作集 7)』、勁草書房、1963 年、41 頁。
[31] 綱島梁川述『ルナン氏耶蘇伝』、東京専門学校出版部、1901-1902 年。ルナン、網島梁川訳、安部能成訳補『耶蘇伝』、三陽道書店、1916 年。
[32] 出隆『出隆自伝』(『出隆著作集 7』)、勁草書房、1963 年、32-33 頁。

のであろう。後年にも、大西操山の『西洋哲学史』を読んでいる。また、梁川を知るのはキリスト教に入信した実兄からであった。六高受験以前から梁川の倫理学書ではなく、『病間録』などのエッセーに親しみ何度も読んでいる。また、明治 40 年に亡くなった梁川の命日 9 月 14 日になると彼を追悼するように思い出している。「綱島栄一郎氏(梁川)は一昨年の今日逝かれしなり。師は逝く、人は逝く。(9/14.p.150)」梁川に対する出の出会いは、大西祝に対する知的なものとは異なり極めて倫理的実存的である。それをみる前に、出の実存的問題をもう一度整理しておこう。出は青春の煩悶を次のようにまとめている。「「想世界の敗将として立ち籠もる牙城は恋愛なり」と透谷は泣哭している。…… 世界に迷う少年の心。煩悶、懐疑、生如何、死如何？の問題に苦闘の後、疲労したこの人に、ここに死と恋愛とが残されていた。―― 死のうか。佳人を得て語ろうか、彼[透谷]はこの両者を択んでともに成し遂げたが、私はただその間に迷うのみ。自殺も出来ず、盲信も出来ず、熱狂することも出来ない私は、貧血の弱者であり、敗将ならぬ弱卒の感切なり。―― 実社会にも出来得ず、想世界にも立ち籠り得ないで、暗い底知れぬ懐疑世界に中立する私。…… (6/13,p.38-39)」 想世界とは生死に意味を確定しようと探究し懊悩する精神的世界であろう。その解答を得られぬ者の現実的慰安の場所は死か恋愛である。その両者を得た透谷とは異なり、その両者の間に惑う出少年の姿。思春期にありがちな悩みとかたづけるのは簡単である。しかしこれは青春の普遍的問題であるとともに明治 30 年後半期以降にみられた時代的病いである。＜煩悶＞は文学的哲学的概念であった。出少年もまた、藤村操と同じ煩悶を懐き、それに苦悩している。進学の悩み、それを阻む養父との関係、またS子への恋慕も相まって、その煩悶に明確な形式を求め懊悩しているのである。この煩悶に思索的基盤を与えるのが、まず綱島梁川の宗教的思想であった。

藤村の投身自殺以来、煩悶は時代的病いとなった。それ故に、煩悶に対する否定的評価が多く出された。この評価に対して、梁川は正面から反論を行う。個々の問いに梁川が反論する前に、その総括的意見を示す。煩悶こそが生命の実相であり、人間救済の力であると見る。「凡そ有りと有るもの、生きとし生けるもの、何れか自家分上［自らにそれとして与えられたもの］の煩悶なからむ。煩悶は萬有之向上形式也。…… 人を救う力は煩悶也、煩悶の導き致る解脱なり、大覚也、祝福也。自己存在に対する煩悶、嗚呼世にこの一味の自覚ばかり、沈痛にして深奥なるものありや。」

続いて、世に行われている煩悶に対する批判を枚挙し、それに答える。「君曰く、天地人生の謎語、豈煩悶の解き得る所なんやと。」これに対する反論。「君聴け、げに人生の謎語は永(ながら)へに全く解くるの期なきかも知らず。さはれ、若し其の一點一角にだに光を輿へなば、是れ既に一気、神に薄(せま)りて実在の奥秘を捉らへ得たるものにあらずや。」

「君曰く、煩悶は解脱の悲しむべき手段方便なりと。」――「煩悶は解脱の手段たると共に、一面には又その一内容たる意義のあるを観ぜざるべからず。煩悶と解脱とは、同じ生命(いのち)の血を分けたる姿異なる兄弟(はらから)なり。」

「君曰く、煩悶はなるべく手軽にあっさりと済ますがよしと。」――「我等が煩悶は已むことを得

ざる心奥の声の迸溢(ほういつ)なり、塞ぐべからず、弄(もてあそ)ぶべからず。」

「君はまた煩悶の主観的、利己的なるを難じて、社会的貢献の要を言ふ。」——「それ深く人格の根柢を養うて …… 徳器を圓成し、「徳本を植う」る、これ亦偉(おお)いなる社会的貢献ならずや。」

「君は煩悶の模倣流行を厭ふ。」——「したり顔なるは何の意(こころ)ぞ。煩悶は己が自覚上のこと也。」

「君は煩悶が人の子を厭世自殺の淵に導くを恐る。」——「深く人生の意義の惑うものは、直ちに全世界、全人類の存在さへ詛(のろ)ひ詛(のろ)うて其の都滅皆空を冀(こいねが)ふなり。何等の否定ぞ。されど大いに否定するは大いに肯定せんがため也。」

「終はりに君は曰く、煩悶竟(つい)に労働に如かず。人生は思考にあらずして労働にありと。」——「是くの如き一種の結論もしくは信念は、その是非如何は旦(しば)らく措きて、取りも直さず君がさきに極力排拒せる煩悶そのものを経て方(まさ)に得たり得べきものならずや。深く人生的意義に分け入ることなくして、かゝる一種の理想、信仰の形づくられんやうなきにあらずや。」[33]

梁川の個々の反論は必ずしも論理を尽くしたものではなく、梁川の<見神の実験＞による信仰を基盤とする経験的確信である。その上で、煩悶の人生上の意義を称揚する。彼の信仰の体験とその変遷は、基督に対する無差別的盲信時代、それにつづく二元的懐疑時代を経て調和的正信時代と三期に分かれ[34]、自ら信仰に対する煩悶を十分に経験している。また、結核を抱えつづけてなされた彼の思想的営為は多くの人に影響を与えた。出少年もその一人である。

出にとって梁川はあこがれの存在であった。まず、煩悶に対し多くの批判のある中、梁川は煩悶を「萬有の向上形式」と規定し、解脱の裏面であることを示した。さらに煩悶を経由して神子(神の子)の自覚を獲得し、神人合一の境地を<見神の実験>を通して実現した。いわば安心立命の境地を得たのである。それをなしえない出は、梁川への尊崇の念を懐いた。「我の帰する所が神との合致、神子に自覚にあるか否か、そこまで我を追求しよう。綱島梁川先生は、どこまでも羨ましく強い神子である。[11/15, p212-213] 」

梁川の出に対する思想的影響はその人格的卓越性から来るだけでなく、出の自我論にも及んでいる。東洋思想にも精通している梁川は、<無我>との比較において自らの自我論を展開する。それは近代的個人主義的な自我でもあるが、それを通り抜け神人合一に到る宗教的自我でもある。「思ひ即ち意識てふものの存在は確実な事実であるが、唯思ひの所有者たる「我」てふ如きものは、空想上の仮構物ではないか」という疑問に対して、デカルトをもってして答える。「デカルトの所謂「我思ふ、故に我在り」の「故に」は、三段論法的の推論ではなく、…… 寧ろ直観である、意識直接の自證である。思ふてふことがあればどうしてもそれに即してそこに「我」てふ者の現在の直観せざる得ぬのである。思ひあれば思ふ者がある。この思ふ者は …… 断えず移り動いて已まぬ、而してかく移り動く念念(ねんねん)の間に、終始一貫して常恒性の者が」ある。ここに至る推論、その結果としての自

[33] 綱島梁川「人に輿へて煩悶の意義を説く」、『綱島梁川集』(安部能成編)、岩波文庫、1926 年、59-68 頁。
[34] 綱島梁川「枕頭の書」、『綱島梁川集』(安部能成編)、岩波文庫、1926 年、133 頁。

我は極めて近代的といえる。さらに自我の確立のその個性を強調する。これこそ、近代個人主義である[35]。「「我」は天地の間に於ける無類特絶の一物也。之を称して個人性といふ。「我」の「我」たる所以の意義は個人性を有する所にある。」

しかしこの近代的自我を突き抜け、梁川は宗教的自我を主張する。まず、霊魂の不滅に及ぶ。「基督教が死後に於ける一種の霊体の存在を言ふは、単に一片の信仰や希望に止まらずして、確乎たる合理的思想と謂わねばならぬ。」梁川の思想の独自性はこの点にあるのではなく、個人性の主張と実現が他者との対立を引き起こし、そこにある種の＜さびしさ(悲哀)＞をもたらすと認識した点にある。「個人性の発揮には一種のさびしさがある。…… 個人性を発揮すれば発揮するほど、世と遠ざかる孤独のさびしさあれど、而もこの惨(あさ)ましき事実があるために、我等は真の自由と生命とを得るのではない乎…… 最も偉大なる個人性を有してゐた基督は、世にも最も深刻なるさびしさと悲哀とを味うた人である。」[36]

出は梁川の自我論を学び、自己の煩悶に適用したといえる。「悲哀の自覚なき者とは共に語るに辛し。梁川氏(病間録、寸光録)の福音に接して、真実への道が悲哀の奥にあるを知り力強きものを感ず。しかし果たして我、今わが悲哀の前に赤裸々に我を提出して立てりや否や。全世界の栄華を以てするも癒しがたき甚深の悲哀 —— 十字架のイエスの悲哀 —— の速やかに我前に現前せよ、我はそが前に佇立して戦わん。[11/18,p.217] 」自分の貧しい悲哀（進学の悩み、養父との葛藤、S 子への恋慕）にもほんとうに対決できるのであろうか。しかしこの世の甚深な悲哀を前にして、この自己を試してみたい。これは梁川から学んだ煩悶を解脱に変える倫理学であった。しかし出は入信して、梁川の第三の調和的正信の時代に至ることはなく、第二の煩悶・懐疑の時代にとどまるであろう。出は梁川の後に従うのではなく、また従うこともできなかった。出が梁川に続いて学んだのは、哲学者デカルトと桑木厳翼であった。出は梁川の自我論にデカルトのそれを接ぎ木するのである。

４—２．桑木厳翼とデカルト

出が哲学に出会うのはまず中学校時代、同郷の先輩大西祝の『西洋哲学史』からであるが、本格的には六高入学が決まって以降のことである。入試合格以前の出は文学青年であって哲学青年とは言い難い。哲学青年、出を形成したのは綱島梁川と桑木厳翼の著作であり、デカルトとの出会いは桑木によるデカルトの翻訳と解説である。とくに、桑木の『時代と哲学』は何度も読んでいる。六高入学決定後の 8 月 30 日に、ラッドの『宗教哲学』による哲学への関心が深まり、「哲学よ！恋しき怖ろしき学科よ！」と哲学への憧憬が始まる。六高入学後の 10 月 18 日に文庫(六高図書館)で桑

[35] 末木文美士「神を見る綱島梁川」、『明治思想化論』、トランスビュー、2004 年、191-199 頁。氏は綱島の<個>の自覚の重要性を仏教の<無我＞と<他力>との比較のもとで考察する。また、井上哲次郎が彼の思想的芽を摘み取る様を指摘する。

[34] 綱島梁川「我とは何ぞや」、『綱島梁川集』(安部能成編)、岩波文庫、1926 年、191-203 頁。

木の『時代と哲学』を読み、「容易に安心を得んと欲する者は理智と絶ちて宗教の信仰に奔れ、余も亦此状態の何人にも若干時の間存在するを信ず、然れども理智を昧(くら)ます能わざる者は哲学に赴かずして将た何所に帰せんとするぞ。」という一文に惹かれ、「我が懐疑に強い基礎、裏打ちされた感あり」と感激を記している。すでに梁川のものは読んでおり、信仰と哲学とが綱引きをしている。

二日後 10 月 20 日に『時代と哲学』を借り出して読んでいる。さらに 10 月 22 日にもこの書を読み、その中の「徹底と煩悶」に強く心を打たれる。「曰く『世の道を説く者、之を大別して二となす。一は即ち其説く所 輙(すなわ) ち其の行ふ所となり、向上の理想を画きて能く之を実現するを得るものなり。一は即ち想徒らに高くして業未だ之を達せずもの也。…… 前者はその知る処に徹底し体認し、後者はその知るあるが為に煩悶し懊悩す。後者はその目標が実現可能以上に高く、それとの落差に悩むだけではなく、そもそも自分が為に煩悶し懊悩す。』[10/24, p.176] [37]」前者は人生の目標を明確にしかも実現可能な形で設定し、その実現に邁進する。後者は人生の価値にかかわる形而上学的理想が問題となる。現実主義と理想主義の対立であり、世俗主義と超俗主義の対立でもある。もちろん出は後者に属していた。

桑木も梁川と同じく、煩悶の重要性を説く。「更に思ふ、人生は努力なり、活動なり、而して煩悶は即ち活動の源泉なり、煩悶終る所活動即ち已む、..... 唯煩悶の生活は真に人らしき生活なり、人が人らしきを不當ならずとせば、煩悶の生活亦欽くべからずや。[38]」この箇所を出は手記に記す[10/24, p.177]。 梁川は煩悶を人生の実相とするが、桑木は人生に必要物と見なすものの実相とは見ない。「今の道を説く者、徒に偏狭の主義を貫徹せんとするあり、所謂本能論者は之に激して起る者か。漫りに努力を勧めて雅訓を欠くあり、所謂ロマンチシズムは之に抗して立つ者か。而して真の徹底と共に興らず。[39]」偏狭な徹底に陥らない客観的徹底の実行が理想であるが、それには煩悶が必然的に伴う。桑木は、闇雲に努力を強いる本能論と現実を無視する理想主義との中庸の実現に必要なかぎりでの煩悶を認めるだけである。徹底的な煩悶のその基底に見神などの解脱を見いだそうとする梁川とは異なる。

桑木の「徹底と煩悶」は、出が哲学を専攻するために六高退学の意志を固めるのに重要な役割を果たした。10 月 10 日、津山で養父に直接、転科の希望を述べるが拒絶され絶望の淵に追い込まれる。10 月 22 日、意を決して養父に四間に及ぶ嘆願状を送付する。この間に、出は集中的に桑木の『時代と哲学』を読んでいる。その中の「徹底と煩悶」に、自己の決意を投影させたと言ってよかろう。

出は桑木の翻訳した『デカルト』からも多くを学んでいる。彼のデカルトとの出会いは、大西操山の『西洋哲学史』からであるが、デカルトのテキストに接したのは桑木の翻訳による。出がデカ

---

[37] 桑木厳翼『時代と哲学』、隆文館、1904 年、100 頁。
[38] 同書、103 頁。
３９ 同書、104 頁。

ルトで問題にしているのは自我の問題である。『手記』には桑木から学ぶ以前にこの問題に悩んでいた。「二種類の『我』がある。 —— 感情よりのと理性よりのと、熱冷二種、感理二種。この二者は常に矛盾している。闘争暗闘。[8/7, p.97] 」これは直接的には恋愛問題に関わる発言である。「恋よ、妄想よ、幻想よ、去れ、ピューアな我となれ。 —— これ、感情的理性の声也。[ibid.] 」しかし三日前の信仰と理性の問題にも響き合っている。「信仰、信仰、これ感情の奴隷ならずや。しからば …… しかり、梁川の如く見神の実験せんと欲するは何故か？ …… 梁川氏のように神を直観しようと僕は欲した！しかし、見神の信仰も、理知の目を盲にするの意ならずや。[8/4, p.95] 」

こうした問題意識に対して彼に哲学的思想的基盤を与えたのは、デカルトである。桑木の『デカルト』から思索の哲人デカルトを学び知る。「「不断の研究、真正の煩悶なる哲学は実はデカルトに於いて、現はれたり云々」我悲哀し煩悶す、故に我存す。悲しむ我のそこに我神に接せん。デカルトと梁川。[11/27, p.234] 」11 月 27 日のこの発言は、六高を退学しいまだ代用教員の職にも就いていない一番不安定な時期のものである。デカルトのコギトは通常、科学・哲学上の認識問題の形而上学的基盤と考えられ、倫理問題は＜暫定的道徳＞で解決済みという構造になっている。しかし出の場合、梁川から学び知った近代個人主義的自我（北村透谷の自我でもある）とそれを超越しようとする倫理・宗教的自我の問題がデカルトの自我論と遭遇し、認識問題の形而上学ではなく自我の実存的確実性の問題へと転換している。

「私はついに近頃、この懐疑の奥に、この懐疑と懐疑的の煩悶と悲哀とを通してその甚深の奥底に鋭く突き進めゆく道「懐疑の正路」を梁川とデカルトから教えられ、この道こそは、いばらの道ですが、理性の大勇猛者の踏むべき正道と確認するに至りました。[12/6,p.249] 」この＜近頃＞とは、<理性の覚醒>を経た今日という意味で、過去の<甘い詩情的表情>をともなった悲哀、煩悶ではなく、「苦い理性の汁をすって以来、虚偽の煩悶、空虚な悲哀です。[12/6, p.248] 」自己の心情の問題がただ単に感情の問題としてではなく、理性に反省をともなった苦悩として把握された。出が自分の意志で哲学に身を捧げるために退路を断って六高を退学するという実存的問題がこの＜近頃＞に含意されている。ロマンティシズム的で感情的な自我の懊悩が、「懐疑の正路」を経て「理性の覚醒」と伴いデカルト的懐疑は「我在り」の深底に存する実在を探究する。

「デカルト「我思故我在」について考う。食うが故に我存す。食わず存せず。食っていることは事実なり、されどこの食うてふ事実は食う我の存するを予定す。この我の存するや否やは、しかし疑えば疑い得る。…… 感じる、迷う、悲しむ、故にこの悲しみの底に何かが存する。それが真実在か大我か悪魔か神か。悲哀の深底に大実存者あり（梁川）。 …… 悲しみ、故に我存す。何か求めて迷っている、故に我居る。しかしそれよりか更に強い我の実在を確信したい。我を求む！求む！故に存す？（夜の求我）[12/22, p.282] 」

梁川に憧れ、近代的自我以上の倫理・宗教的自我の実在性（真実在）を確信し、梁川の実在確証の思想的プロセスを追体験しようと、出はあがき懊悩する。そこにデカルト的自我の論理構造を重

ね合わせ、自我の哲学的構造そのものよりは安心立命としての安定的な自我の探究という倫理的解脱に向かう。12 月 22 日のこの日から、出は「『求我論』と題するノートに、日々の感想や思索を、多少論文風にまとめて記すこととす。 …… <<この『求我録』は残存せず>>」[12/22, p284] 出のこの倫理・哲学・宗教的自我論は、一方で「恋する、故に生く、存す、というところまで恋せよ」というような心理的問題をも包含していた。「我はデカルトの末裔」と出も叫ぶことができたであろうが、彼もまた藤村操の末裔でもなかったか。

５．出の自己批判：独断論から批判主義へ

出は明治 43(1910)年 9 月に六高一部乙類に再入学する。ところがあれほど狂おしく恋い焦がれていた哲学への想いは冷めていた。「ところが、考えてみると、せっかくやるぞと決心して再入学したのみ、さきの哲学熱はどこへかいったものらしい。[40]」その理由は述べていないし、無責任な発言にも聞こえる。『出隆自伝』は雑誌『理想』に 1961 年 7 月から「哲学五〇年を語る」と題して連載されたもので、50 年以上の年月を経た過去を冷静に批判的に回想している。大学に入学した出が六高時代の出を批判する。さらに大学時代の出への批判は 1961 年当時の出から行われるという二重の形を取る。批判の内容は二種類に分かれる。第一は、六高の理系を選択しながら、何故その意志を貫徹できなかったかというものである。第二は出の哲学観の変貌という問題である。六高の出は綱島梁川とデカルトの思想的影響を受け、＜我思ふ＞の基盤である<我在り＞の確かな直証を求めるというドグマチズムの立場に立っていた。東大言語学専攻当時に聴いた松本亦太郎の心理学講義を契機に、実在の把握というドグマチズムと別れを告げ、その翌年から三年間、桑木厳翼の批判主義と波多野精一の哲学史を学ぶことになる。この哲学観の変貌がドグマチズムから批判主義への移行である。

第一の問題で、出は当時の青年像のうちに自分の立場を定位する。弁論部などに集まる正義派と文芸部に与する軟派のどちらにも彼は属せない＜小心なピューリタン＞であった。「僕のような貧乏士族の孫」には「軟派の連中につきあっていけるような生活」はできない。一方で、「僕自身、あまりにもピューリタン的・クリスチャン的でありすぎたのか。」「軟派・文学的と律儀者的・倫理宗教的との両面から——しぼり出されて哲学にむかった。」[41] では、何故最初に選んだ理系を放棄することになったのか。『手記』の説明では、哲学に憧れ、これを専攻したかったというものであった。ところが『自伝』では少し違う。「哲学をやろうといって二部をやめたのは、あの『手記』にははっきり書いていないと思うが、実は二部乙に恐れをなしたからだ。[42]」理系に恐れを懐き、ついて行けそうになかったから哲学に向かったという消極的理由になっている。『手記』では明らかに、哲学

[40] 出隆『出隆自伝』(『出隆著作集 7』)、勁草書房、1963 年、42 頁。
４１ 同書、38－39 頁。
４２ 同書、39 頁。

への憧れという積極的理由であった。この違いは何故であろうか。69 歳の出による六高生出の評価である。理系の学問が得意ではなかったとしても、それに耐える気であればそれなりにできたと思われる。69 歳の出はおそらく理想主義的でやや破滅主義的な 18 歳の出を面はゆい気持ちで眺めていたのであろう。

第二の出の哲学観の変貌という問題は複雑である。その主題は、まずドグマチズムとの別れであり、続いて批判主義との出会いである。

哲学熱の冷めた出は大正 3(1912)年、東京帝国文科大学文学科言語学専攻に入学した。出は「思想と表現、DenkenとSpracheの関係をまず学ぼう」としたが、「のちにギリシア語の田中秀央(ひでなか)先生にこの話をして、先生から、「そのようなややこしいことは、ここではやれません。ここのはフィロロギーではなくて博言学ですから、」と言われて、がっかりした。[43]」いろいろな言語を学ばされるのに嫌気がさし、翌年哲学科に転科し、それと同時に京都大学から転任してきた桑木厳翼に学ぶことになる。ただ、田中からはギリシア語とラテン語を学び、恩師と尊敬している。言語学在学中に出の哲学観は一変する。それは松本亦太郎の心理学の授業によってである。「心理学の講義で、感覚とか意識とかのことを学び、対象そのものを認識するということは、身体器官の構造上、もともと不可能なんだということを知り、…… そういうわけでなんか自分の求めていた哲学と言うものが別の意味でわかってきたような気がした。その次の学年から、僕は桑木先生に接することになるんだが、その桑木先生の味けない不可知論的な批判主義を、僕がほとんどなんらの抵抗も感じないで受け取ること[44]」ができた。このときのノートを出は製本して大事に持ちつづけたという。そのノートの最後に、「”I didicate this note book to the memory of my lost Dogmatic and Sceptic Lady” と書き込んでいる。…… 絶対的真理をとらえこれと一体になろうというような＜ドクマチズム＞とそれが知れないで疑い迷っている＜スケプチズム＞との両面をもつ＜レディー＞が、今ここで亡び去ろうとしている。[45]」 真実在の探究というドクマチズムとそれに達し得ない煩悶の矛盾から、出はここで解放される。

第二段階は桑木厳翼の批判主義との出会いである。桑木の授業で学んだものはウィンデルバンドに従った西洋哲学史とカント『純粋理性批判』の演習である。そこで得た哲学的立場が批判主義である。桑木の批判主義は彼のカント解釈に由来する啓蒙主義的文化哲学である。桑木はまず<批判＞を、「適当に種々の問題を分割して或る問題に対する諸種の見方に其れ其れ相応の意味を認めんとする」「知識の価値批判」の方法と考える。さらに物自体の独自な解釈を加味することによって、文化的批判主義を構成するに至る。普遍的法則は自然科学の領域内で有効で、直観形式と範疇の統一を通じて認識される。一方、個別的なもの、歴史的な経験は物自体(複数形)であり、それらを目的

[43] 同書、46 頁。
[44] 同書、74 頁。
[45] 同所。

論的に評定する「文化に関する学的認識」が成立すると考える。[46] 桑木はこの批判主義の立場から旺盛な評論活動をする。先述の桑木の<煩悶>に対する解釈もこの批判主義から相対的に価値評価がなされたのである。

出は波多野精一からギリシア哲学史を学んだのであるが、それは哲学史の知識の獲得というものではなく、哲学研究のあり方そのものであった。「プラトンの対話編の真偽問題や成立年代順の問題、そのイデア説の形態の変遷等々 …… というよりか、本格的な哲学研究というものは —— 実は哲学研究ではなくて他の哲学者の哲学説の哲学史的研究のことだったのだが、そうした哲学研究はこうしたものだ、と初めて教えられたような気がした。[47]」

出の哲学的変貌は、まず主観主義から客観主義へというものである。問題の対象が自我ではなく、自我を構成する世界の哲学的考察へと移行した。さらにそのことの結果、倫理学的関心から認識としての哲学的関心へと移行した。要約すれば、哲学青年としての思想家から学者たる哲学史家へと変貌したのである。しかしことはこれだけでは終わらない。69 歳で『自伝』を述べる出からなされる東大学生以降の出に対する批判が、この哲学的変貌に続く。出の学者としての経歴は極めて順調であったといっていいだろう。しかしのちに出自身への自己批判をも含めた時代への批判は、この順調な経歴の流れの中で形成される。その具体的事実は『自伝』の中でいろいろと述べられるが、その端緒とでも言うべき、哲学館事件について考えよう。

この事件の関係者でもある桑木厳翼自身からこの事件ついて教えられる。その時期は、彼が哲学史を専門にしようと決意した大正 9(1918)年頃である。明治 35（1902)年、中島徳蔵が哲学館(現東洋大学)で桑木の翻訳したミュアヘッド『倫理学概論』を用いて授業を行っていたときに事件は生じた。この本には「君主が悪逆なら臣下はこれを殺してもよい、動機が善だから[48]」という主題があった。初版ではこれを原文通りに訳していた桑木だが、第二版では君主国日本ではこれは不穏当として「そこだけ象嵌で改訂[49]」した。ところが本屋のミスで第 3 版以降、もとの初版のままになっていた。この版を利用した学生の答案にこの趣旨が答案にふれられて、それが視学官（隈本有尚）の目にとまり問題となったのである。

この事件の要素には、私学の教員免状の問題、それ故に私学の経営問題、教師の教育上の自由、国家による教育統制、さらに天皇制の問題に及ぶ複雑な問題であった。8 年後の明治 43 年には、幸徳秋水を巻き込む大逆事件として、その悪しき結末を生みもしたのである。この事件に対する出の見解は、(おそらく 69 歳の彼からのものであろうが）次のようなものである。「なお、ここで注意しておきたいことは、…… 不敬事件として、全く伏せられ隠されていて、当時の記録では、天皇制の

---

４６ 伴博「桑木厳翼」、『近代日本哲学思想家辞典』（中村元監修）、東京創元社、1982 年、223－226 頁、参照。

４７ 出隆『出隆自伝』(『出隆著作集 7』)、勁草書房、1963 年、95 頁。

４８ 同書、156 頁。

４９ 同書、157 頁。

問題であったと知られず、言論自由の問題、思想統制の問題などにすりかえられたのである[50]」とわざわざコメントしている。

しかし桑木からこの事件を聞いたとき、このような批判的見解をもったとは思われない。ある印象や感情を懐いたであろうが、それを意識化したであろうか。むしろそれを隠蔽したのではあるまいか。この事は明確にはできないが、学生から哲学史家への変化していく出自身の様子を述べている。そこにこうした無意識の隠蔽を感じさせるものがある。「長男哲史が生まれた大正九年の秋ごろで、そのころ僕は西洋哲学史を専門にやろう、…… 哲学史家（ヒストリカー）になろう、と考えていて、その記念にと言えばおおげさだが、 …… 長男を「哲史」と命名した。[51]」さらに哲学史家になろうとした背景について説明する。「僕が哲学史を専門にやろうかと考えたのは、自分の独断的な気質を恐れてでもあったが、それよりもむしろ日本の真実 —— 天皇制の虚偽性 —— にぶつかるのを恐れて、いわば「良心（ちっぽけな良心）にはじないように」と言うのだった、と言った方がほんとうに近いようだ。これも実は、批判的・是々非々中立主義 —— 非を非とする勇気のないリベラリズム —— の本性をだして、「さわらぬ神にたたりなし」とにげただけのことだが。[52]」これは 69 歳の出の 30 歳前後の出に対する批判であろうが、30 歳前後の出の精神的状況を表現している。学生時代の教師たちをいろいろと批評した後で、「こうした教授たちは、要するに僕の哲学青年的コンプレックスから毒気をぬいて、僕を俗物化への道を会得させたようだ[53][これは学生時代についての発言]。」さらに、「批判的精神は古くから哲学のもつ立派な伝統で、…… それは西洋のことで、現実の日本のことになると、「この国」には哲学がない批判的精神に欠けている、だからこうなんだ、と思っても、だから「この国」をどうしようという気にはならない。どうしようにも相手がないんだから、どうにもならない[54]」こうして現実への順応主義を、デカルトの暫定的道徳に比して、69 歳の出から皮肉が発せられる。「デカルトの『方法序説』の暫定的実践規則や、…… そういう不徹底、お便宜主義、妥協主義が、全く受け入れられないほどの僕ではなくなっていた。[55]」以上は、69 歳の出からする 30 歳前後の出とその時代に対する辛辣な批判である。ではあるが、30 歳前後の出は、その当時これほどに自己批判を感じてはいなかったであろう。それでも、ある諦念を以て、この状況を引き受けたことであろう。

69 歳の出は、研究者として自立する出に追い打ちをかける。かつての六高生であった哲学青年出を先の引用 53 の後に彷彿させる。「「虚構の神話の上に立つ神聖不可侵の一系。これを文句なしに崇敬させられる国民よ、帝国よ。」(『哲学青年の手記』、295 頁)と書いたりして憤慨していた十年

[50] 同所。
[51] 同書、154 頁。
[52] 同書、155 頁。
[53] 同書、90 頁。
[54] 同書、158 頁。
[55] 同書、158-159 頁。

前の「哲学青年」ではなくなっていた。[56]」その『手記』には、次のような記述もある。「10 月 27 日。昨夜「伊藤公、ハルビンにて韓人に狙撃さる」との報あり。 …… 「六高在学の韓人をなぐれ」だのと悲憤慷慨、周章狼バイし、また「この伊藤公の薨去(こうきょ)に涙なきは日本人に非ず」とまで言った。…… まるで蛮人であり狂人である。僕はその気勢に圧倒されて言葉が出なかった。しかし涙も出ない、心で笑った。そして思って、憤慨した。」[10/27, pp.180-181] これは既に 10 年前に失われた哲学青年の理性的憤慨である。

このように、六高から 10 年を経た出隆は、「外国の古代からの哲学の歴史をこつこつやっている方がましだ」、「政治や国家の現実に直接ふれようとしない批判主義哲学——科学批判と文化批判の哲学——の方がまだまし」[57]だと思うに至った。69 歳の自伝執筆の視点からは、それをも批判しようとする＜哲学老年＞が確かにいる。

「「哲学」はその最初の人ソクラテス一代で、アテナィ政界と絶縁した。アテナィはソクラテスと共にその「哲学」を殺し、よってその後の哲学を骨抜きにした。或いは、哲学はその政治を嫌いこれを顧みない哲学にと変質した。その直言者を許さなかった政界は直言者から敬遠された。[58]」「しかしながら、哲学と政治とは、いつまでも無縁のものであることは許されない。哲学の政治性と共に政治の哲学性が切に要望される。我々の政治はソクラテスを殺しプラトンの直言を封じたようなアテナィのそれであってはならない。同時に我々の政治は現実への直視と直言とを避ける無論理的で無気力な個人倫理に止まっていてはいけない。[59]」執筆は 1941 年 7 月 10 日、日米開戦の 5 ヶ月以前、出隆 49 歳。哲学青年、哲学老年ばかりか、哲学壮年、出隆がいた。

６．デカルトの翻訳

出隆のデカルトの翻訳は大正 8（1919）年 8 月で大村書店から出版された。この出版で大村書店が始まり、昭和 3（1928）年の夏、円本ブームの前に大村書店が廃業するまでの出との〈運命的〉な関係が始まる。[60] 大村書店を創業した大村群次郎は六高の後輩で、中退して上京し、同郷の知人赤木桁平を通じて知りあった。大村は岩波茂雄に憧れ出版業を営もうとして、その企画編集などを出隆に依頼したのである。編集顧問になった出が初めに企画したのが＜哲学名著叢書＞で、これは大正 4（1915）年頃から出版されていた岩波書店の<岩波哲学叢書>に対抗したものである。「えらい人は岩波に引き抜かれているので、結局、僕らと同じ年配の学友にたのむことに[61]」なった。この企画

５６ 同書、158 頁。
５７ 同所。
５８ 出隆「哲学を殺すもの」、『哲学を殺すもの』（『出隆著作集 6』、勁草書房、1963 年、109－110 頁。初め「アテネと哲学」と題し雑誌『改造』（1941 年 9 月号）に発表、解題して「哲学雑誌」（1942 年 2 月号）に転載。『ギリシアの哲学と政治』に収録。
５９ 出隆「哲学を殺すもの」、『哲学を殺すもの』（『出隆著作集 6』、勁草書房、1963 年、110 頁。
６０ 出隆『出隆自伝』（『出隆著作集 7』、勁草書房、1963 年、235，255 頁。
６１ 同書、239 頁。

は、彼のデカルト、近藤哲雄のフィヒテ、善浪達童のバークリー、征矢野晃雄のヤコブ・ベーメの四冊で中止となる。彼の師の<世界哲学文庫＞を継承するつもりであっただろうが中途半端な結果となった。

出自身のデカルトの翻訳は大変な苦労があったようである。翻訳の原本はアダン・タヌリ版を用いているが、これは研究室蔵で「持ち出し禁止」のため、「各パラグラフごとにノートの左側の頁に克明に写して」翻訳した。フランス語は太宰に、ラテン語は田中に指導を仰ぎ、出版にこぎ着けた。当時、「ジルソンのデカルト研究が公刊されていたら、ジルソンにとどまって、したがって古代までさかのぼりはしなかったかもしれない。」出はスピノザから哲学研究を開始し、デカルト、中世、ギリシアへとさかのぼり、ギリシア哲学の研究者になるのであるが、もしジルソンのデカルト研究を1919 年当時読むことができていれば、ギリシアまでさかのぼることなく、デカルト研究者となっていたかもしれないという述懐である。[62] エチエンヌ・ジルソンは 1916 年、『デカルトに於ける自由』と副論文『スコラ・デカルト哲学索引』[63]で博士号を取得するが、出は当時この文献に接することができなかったのであろう。ジルソンは 1920 年代から旺盛に中世哲学とデカルトについての研究を著わす。名著として名高い『注釈版・方法序説』の出版は 1925 年で、出の翻訳には間に合わなかった。この注釈版を大いに利用したのが岩波文庫にも入っていた落合太郎の翻訳である。また、第 1 版では、1 パラグラフ脱落があり、それを三宅剛一が『哲学研究』誌の書評で指摘したので、第二版以降訂正をした[64]。桑木の<世界哲学文庫>、出の<哲学名著叢書＞はのちの岩波文庫青版のような企画であったようだ。出のデカルト訳は数年で三版を重ねた。しかしデカルト以外は「原著者の名前があまり知られていなかったためか、売れゆきが思わしくなくて、[65]」この企画は四冊で終了する。

続いて<大村論文叢書>を企画する。「狭義の哲学にかぎらず文芸・宗教・政治・法律にもわたった幾らか基礎論的・哲学的な西洋の新しい論文を安く読めるように」との企画であった。出は「まず隗より初めよ」というわけでウィンデルバンドの論文集『プレリューデン』から「哲学とは何ぞや」を訳出した。[66]大正 9 年 11 月初版で、翌年 8 月には 6 刷という売れ行きであった。叢書は 20 冊企画され 18 冊が刊行された模様である。全体としてバランスの取れたいいもので、岩波書店の<哲学叢書>とも競合できたのであろう。

出はウィンデルバンドの『哲学とは何ぞや』を翻訳したために、『哲学以前』を執筆することになる。その意図を『哲学以前』の初版序文を引用して述べている。「「哲学がわからん、要するに哲学

---

[62] 同書、239-242 頁。

[63] Etienne GILSON; *La Liberté chez Descartes et la Théologie*, Alcan, 1913. *Index scolastico-cartésien*, Alcan, 1913 . René Descartes. *Discours de la méthode, texte et commentaire*, Vrin, 1925.

[64] 出隆『出隆自伝』（『出隆著作集 7』、勁草書房、1963 年、241 頁。

[65] 同所。

[66] 同書、242 頁。

とは何ぞやである」と言った人々に対して、この言のある所以を指示すると共に、「哲学を今少し平明に知り度いと願う人々に —— 敢て哲学を教えんとするのではなくて　—— その知り方を（哲学すること＝Philosophierenを）示そうとする試みである。[67]」」『哲学以前』は広く読まれ、過去10回（1922、1929，1936，1949，1950，1951，1955，1963，1970，1983）、発行されている。

順調な経営を行う大村書店は、大正12（1923）年、雑誌『講座』を発刊し、その編集主任の役を出が担っていた。ところが昭和3（1928）年、円本の流行と差し迫る世界大恐慌のまえに、大村群次郎は書店の経営が危ういと予想し廃業を決意した。デカルトの翻訳に始まり名著『哲学以前』を発行した大村書店との丸9年間の運命的な関係はここで終わる。

IV. 結語

<東西交流と文化の翻訳＞という課題に関して、デカルトのテキストの翻訳が日本においてどのような背景でなされたか、また読み継がれてきたのかという問題を考察する。このように、<はじめに>において主題を規定しておいた。そのすべてが果たされたわけではない。

前半の課題については、桑木厳翼と出隆によってなされたデカルトの翻訳という主題である程度なされただろう。桑木は哲学の基本的テキストの翻訳紹介という啓蒙的役割を自らに任じていた。いわゆる純哲（純正哲学）については、デカルトの翻訳がそれに該当すると言っていいだろう。木村鷹太郎のプラトンの翻訳は英語からの重訳である。桑木と出によってデカルトの理論哲学の翻訳がなされた。日本の哲学研究はまずドイツ哲学、それもカントとヘーゲルの研究から開始された。確かにそうであろうが、理論哲学におけるテキストの翻訳（1904）はデカルトのものが、カント・ヘーゲルのものより早い。カントの『プロレゴメナ』の翻訳（1913）は、これも桑木と天野貞▯によって初めて共訳された。ライプニッツがデカルト哲学を＜哲学の控えの間 Antichambre de la philosophie＞であると評したが、すぐれた意味でもそうであるまいか。デカルトが哲学入門（控えの間）的であるからまず、翻訳紹介された。事実であろう。それだけではなく、デカルトは<哲学以前＞に哲学思想を促すというより根源的な性格をもつが故に、綱島梁川を、六高の学生出隆を哲学へ誘ったのではないか。

哲学青年出隆は、藤村操的状況を引き受け、そこから脱出した人物でなかろうか。人生論的煩悶に押しつぶされることなく、梁川、桑木、デカルトから思索を学ぶことで、哲学青年から哲学研究者を経て反骨の哲学壮年とさらには69歳での哲学老年へ熟成したのではないか。

桑木もまた、藤村操的状況と無縁ではない。桑木は一高で授業をしている関係で藤村と二度会って話をしている。「君の初めて我と語るや、既に哲學に就て疑惑を挾めりと雖も、猶自から異日の研究を期せり。後再び會するに及びて疑惑は益深きを加ふるを見る、然かも未だ哲學に就て一縷の望

[67] 同書、244-245頁。

を繋がざりしに非ざるなり。余やまた疑惑に彷徨して信仰に安住するを得ざる者、君の如き懐疑家に對しては、ただ共に研究を期せんことを告ぐるに止まるのみ。嗚呼余は今にして菲才能く君を慰藉する能はざりしを悔ゆるなり。[68]」(「藤村君を弔す」明治 36 年 6 月 4 日) 桑木は藤村の自殺 (明治 36 年 5 月 22 日) 以前の明治 35 年 1 月に、「徹底と煩悶」という評論を著している。そして藤村の死後、明治 37 年 7 月に、「青年と煩悶」を発表した。これは明らかに藤村の死を意識したものだ。「藤村君を弔す」では、藤村の死を悼み、自分の非力を嘆いている。その通りであろう。しかし、1 年後の論評では冷静に青年の煩悶を分析する。時代はすでに青年の煩悶の減少傾向に入っている。それでもこの問題は残りつづける。煩悶の必要は認めるが、その弊害にも対処しなければならない。それ故に「青年と煩悶[69]」は、煩悶と青年の関係を治療的観点から分析する。「先ず煩悶は如何にして起るのであるか。」煩悶は自己の望みが達せられない場合に起こるのである。では、その望みはどのような種類があるか。利益、権力などの現実的なものと、真善美などを理想的なものに類別される。細かな議論を進めた後で、「如何にして煩悶に對すべきか」の問題に移り、消極的方法と積極的方法に分類し、「煩悶者に目的があるならば、其目的は、我の優等の部分であるから、劣等の部分を支配し打勝と云う事がなければならぬ。」煩悶の理性的で知的な克服を当為として述べる。煩悶を主観的で個的な問題に矮小化している。社会的問題を初めから切り捨て、その限りで文化主義的啓蒙を称揚する。藤村はこれができなくて死を選んだ。出は自己の煩悶を確かに理性的に克服した。

後半のデカルトがいかに読み継がれたかという主題はこれからの課題である。日本におけるデカルト研究の歴史に興味があるわけではない。デカルトの思想をどのように自らの思想に組み入れたかということに関心がある。こうした主題に解答を与えてくれそうな人々として今、思い浮かぶのは小林秀雄、森有正、中村雄二郎、柄谷行人などである。

V. 年表

本稿に関連のあるものを中心に作成。

年代	著作と事項
1871 明治 4 年	『明六雑誌』創刊。
1872 明治 5 年	福沢諭吉『学問のすすめ』。ミル、中村敬宇訳『自由之理』。
1873 明治 6 年	明六社設立。綱島梁川誕生。
1874 明治 7 年	西周『百一新論』上下巻。『明六雑誌』創刊。桑木厳翼誕生。
1877 明治 10 年	ミル『利学』上下巻 (『功利主義』の漢訳)。
1882 明治 15 年	東京専門学校設立。

[68] 桑木厳翼「藤村君を弔す」。『時代と哲學』、隆文館、1904 年、400 頁。
[69] 同書、359－372 頁。

1883 明治 16 年	ウエロン、中江兆民訳『美学(維氏)』(1883－84)。
1884 明治 17 年	フェノロサ、東京大学の教師。
1885 明治 18 年	ルソー、中江兆民訳『民約訳解』第 1 巻、仏学塾出版局。東京専門学校(後の早稲田大学)設立。
1886 明治 19 年	アルフレット・フーイェー、中江兆民 訳『理学沿革史』、文部省編輯局。中江兆民（篤介）『理学鉤玄』、集成社。
1887 明治 20 年	ブッセ、東京大学講師。
1890 明治 23 年	明治憲法発布。
1893 明治 26 年	ケーベル、東京大学教師。
1894 明治 27 年	松本文三郎『近世哲学史』(哲学館第 7 学年度正科講義録)、哲学館, 1894。
1887 明治 28 年	『哲学会雑誌』創刊。
1897 明治 30 年	帝国大学を東京帝国大学に改称、京都帝国大学新設。
1898 明治 31 年	ラッド、中島力造訳『認識論』、富山房。
1899 明治 32 年	三宅雪嶺述『希臘哲学史』(哲学館第 12 学年度高等教育学科講義録)、哲学館。
1900 明治 33 年	三宅雪嶺述『近世哲学史』(哲学館第 12 学年度高等教育学科講義録）哲学館。桑木厳翼『哲学概論』、東京専門学校出版部。大西祝没。
1901 明治 34 年	ハイネ、登張竹風訳述『独逸宗教哲学史』(名著綱要文学教育科)東京専門学校出版部。キンデルバンド、桑木厳翼解説『哲学史綱要』(名著綱要文学教育科）東京専門学校出版部。クーノー・フィッシャー、加藤玄智訳述『哲学史要』(万国教育叢書：第 2 編）同文館。中江兆民(篤介)『一年有半』、博文館、『続一年有半』、博文館。波多野精一『西洋哲学史要』、大日本図書。
1902 明治 35 年 7 月	桑木厳翼、「徹底と煩悶」を発表、のちに『時代と哲学』に収録。東京専門学校、早稲田大学に改称。
1903 明治 36 年	法貴慶次郎『中世哲学史綱』、金港堂。
明治 36 年 5 月 22 日	第一高等学校の学生、藤村操が＜巌頭之感＞を残し、日光の華厳の滝から投身自殺。
1903-1904	大西祝『大西博士全集』全 7 巻、警醒社。
1903-1911	松本亦太郎・木村鷹太郎訳『プラトーン全集』、富山房（Benjamin Jowett の英訳 3 版による重訳)。
1904 明治 37 年	4 月、桑木厳翼著『デカルト全』冨山房（世界哲学文庫第一巻)。7 月、桑木厳翼、「青年と煩悶」を発表（明治 35 年 7 月、「徹底と煩悶」の再考、

	『時代と哲学』に収録)。11 月、桑木厳翼『時代と哲学』、隆文館（「藤村君を弔す」所収)。2 月 8 日、日露戦争始まる。
1905 明治 38 年	綱島梁川『梁川文集』、日高有倫堂。『病間録』、金尾文淵堂。
1906 明治 39 年	桑木厳翼『性格と哲学』、日高有倫堂。小林一郎著『プラトーン』冨山房（世界哲学文庫：第二篇)。
1907 明治 40 年	マアカス・アウレリアス、小林一郎 訳『冥想録』参文社。ショーペンハウエル、角田浩編『恋愛と芸術と天才と』、隆文館。綱島梁川『回光録』、金尾文淵堂。綱島梁川没。
1908 明治 41 年	高橋五郎訳『ベーコン論説集』、玄黄社。波多野精一『基督教の起源』、警醒社。
1909 明治 42 年	小林郁 編『コムト 』(世界哲学文庫：第 3 編) 富山房。
1910 明治 43 年	波多野精一『スピノザ研究』、警醒社。
1911 明治 44 年	西田幾多郎『善の研究』、弘道館。
1912 明治 45 年	井上哲次郎 等著『哲学字彙 ：英独仏和』、丸善。
1913 大正 2 年	桑木厳翼、天野貞▯共著、イムマヌエル・カント『縮約　哲学序説』(日本で最初のカントの翻訳)。
1914 大正 3 年	ロージャース、藤井健治郎、北昤吉合譯『西洋哲學史』冨山房 。カント、桑木嚴翼, 天野貞祐共譯『哲學序説（プロレゴメナ)』、東亜堂（初版大正 3 年、改版大正 9 年)。 ベルクソン、高橋里美訳『物質と記憶』、星文館。
1915 大正 4 年	『哲学叢書』(岩波書店)刊行。
1916 大正 5 年	朝永三十郎『近世に於ける我の自覚史』、宝文館。京都哲学会設立、機関誌『哲学研究』創刊。
1918 大正 7 年	大日本百科辞書編輯部 編『哲学大辞書 ：大日本百科辞書』、全 4 巻、同文館。
1919 大正 8 年	デカルト、出隆訳『方法・省察・原理』、大村書店(哲学名著叢書)。デカルト、牛山充訳『方法論』、越山堂(世界名著文庫)。
1920 大正 9 年	ショペンハウエル、姉崎正治訳『意志と現識としての世界』 上中下、博文館。ヴキンデルバント、出隆訳『哲学とは何ぞや』(大村論文叢書：第 1) 大村書店。
1921 大正 10 年	ウキンデルバント、佐竹哲雄訳『論理学の原理』（大村論文叢書：第 6) 大村書店。出隆『哲學以前』、大村書店、1921。『思想』(岩波書店)創刊。
1921-1938	『カント著作集』全 18 巻、岩波書店、刊行開始。

1923 大正 12 年	エミール・ブートルー、村山勇三訳『哲学に於ける科学と宗教』、大日本文明協会事務所。
1925 大正 14 年	朝永三十郎『デカート』、岩波書店(哲人叢書、第 1：この叢書はこの巻のみ)。
1926 昭和 1 年	斎藤要『世界哲学史年表』、聖山閣。
1927 昭和 2 年	岩波文庫刊行開始。『理想』創刊。
1928 昭和 3 年	村松正俊訳『方法通説』、春秋社。
1939 昭和 14 年	落合太郎訳『方法叙説』(『デカルト選書』全六巻、創元社)。
1946 昭和 21 年	桑木厳翼没。
1948 昭和 23 年	今泉三良訳『方法と道徳』、小峰書店。
1950 昭和 25 年	小場瀬卓三訳『方法序説』、日本評論社（世界古典文庫 148)。
1958 昭和 33 年	野田又夫訳『方法序説』(『世界文学大系. 第 13 (デカルト・パスカル)』) 筑摩書房。
1961 昭和 36 年	三宅徳嘉・小松元訳『方法序説』、東西五月社。
1973 昭和 48 年	三宅徳嘉,小池健男共訳『方法序説』(『デカルト著作集 1』)、白水社。
1980 昭和 55 年	出隆没。
1995 平成 7 年	山田弘明訳『方法序説』(『「方法序説」を読む ：若きデカルトの生と思想』、世界思想社)。
1997 平成 9 年	谷川多佳子訳『方法序説』、岩波書店(岩波文庫)。

VI. 文献

『方法序説』の日本語訳

- 桑木厳翼訳『方法論』。『デカルト全』冨山房（世界哲学文庫第一巻）明治 37（1904）年所収。第一編(総論、反駁、批判の三章からなる「序説」。第二編、「伝記」、第三編、緒言、『方法論』(『方法序説』)、『考察録』(『省察』)。
- 出　隆訳『方法』。『デカルト・方法・省察・原理』、大村書店(哲学名著叢書)、大正 8(1919)年、所収。
- 牛山充訳『方法論』、越山堂(世界名著文庫)、大正 8(1919)年。(スコット叢書中、バーフォード・ロウリング訳に依る。 *The Discourse on Methode and Metaphysical Meditations* by René Descartes)
- 村松正俊訳『方法通説』。『世界大思想全集　7』、春秋社、1927 年所収。

- 落合太郎訳『方法叙説』。『デカルト選集. 第 1 巻』 創元社, 昭和 14. (1939)、昭和 26(1951)年、所収。『方法叙説』、岩波書店(岩波文庫)、昭和 28(1953)年、昭和 42(1967)年、改版、昭和 54(1979)、改版。 日本点字図書館、昭和 56(1981)年。
- 川田熊太郎編、『デカルト篇（世界大思想家選集）』第一書房、1940 年。
- 今泉三良訳『方法と道徳』、小峰書店、昭和 23(1948)年。
- 小場瀬卓三訳『方法序説』日本評論社(世界古典文庫)、昭和 25(1950)年。角川文庫、昭和 28(1953)年。『世界大思想全集』河出書房、昭和 31(1956)年、所収。『世界思想教養全集』桑原武夫 等編、河出書房新社、昭和 38(1963)年、昭和 40(1965)年、所収。『世界の大思想』、河出書房、昭和 40(1965)、昭和 49(1974)年、平成 14(2004)年、東京ヘレン・ケラー協会点字出版局(ワイド版)、平成 16(2004)年、所収。角川学芸出版（角川ソフィア文庫)、平成 23(2011)年、所収。
- 三宅徳嘉・小松元訳『方法序説』、東西五月社、1961 年。（論文筆者未確認）
- 野田又夫訳『方法序説』。『世界文学大系. 第 13 (デカルト・パスカル)』筑摩書房、昭和 23(1958)年、昭和 46(1971）年、所収。『世界の名著 22　デカルト』、中央公論社、昭和 42(1967)年、『世界の名著 27　デカルト』、中央公論社、昭和 49(1974)年。『方法序説・情念論』中公文庫、昭和 49(1974)年。 『野田又夫著作集. 1 (デカルト研究)』、白水社、昭和 56(1981)年、所収。『方法序説、哲学の原理　世界論』、中央公論社（中公クラシックス)、平成 13（2001）年。
- 三宅徳嘉,小池健男共訳『方法序説』。『デカルト著作集 1』、白水社、昭和 48(1973)年、平成 5(1993)年、平成 13(2001)年、所収。『方法叙説』白水社(白水社 U ブックス)、平成 17(2005)年。
- 山田弘明訳『「方法序説」を読む：若きデカルトの生と思想』、世界思想社、平成 7(1995)年、所収。 『方法序説』、筑摩書房（ちくま学芸文庫)、平成 22(2010)年。
- 谷川多佳子訳『方法序説』岩波書店(岩波文庫)、平成 9(1997)年、平成 13(2001)年。

桑木厳翼

- ウィンデルバンド、桑木厳翼解説『ウィンデルバンド哲学史要』、東京専門学校出版部、1901 年。
- 桑木厳翼『デカルト』、冨山房、1904 年。
- 桑木厳翼『時代と哲学』、隆文館、1904 年。
- 桑木厳翼『性格と哲学』、日高有倫堂、1906 年。
- 桑木厳翼『五大哲学者』、金尾文淵堂、1914 年。
- カント、桑木厳翼、天野貞祐訳『哲学序説・プロレゴメナ』、東亜堂、1914 年。
- 桑木厳翼『明治の哲学界』、中央公論社、1943 年。
- 桑木厳翼『日本哲学の黎明期・西周の『百一新論』と明治の哲学界』、書肆心水、2008 年。（桑

木の論文の再編集)。

綱島梁川

- ルナン、綱島梁川訳『ルナン氏耶蘇伝』、東京専門学校出版部、1901 年。
- 綱島梁川『病間録』、金尾文淵堂、1905 年。
- 綱島梁川『梁川文集』、日高有倫堂、1905 年。
- 綱島梁川『回光録』、金尾文淵堂、1907 年。
- 綱島梁川『寸光録』、獅子吼書房、1908 年
- 綱島梁川著、綱島政治編『書簡集』2 冊、獅子吼書房、1908-1909 年。
- ルナン原著、綱島梁川訳、安部能成訳補『耶蘇伝』、三陽堂書店、1916 年。
- 安部能成編『綱島梁川集』、岩波書店（岩波文庫）、1926 年。
- 梁川會（編）著『梁川全集』全 10 巻、春秋社、1922-1923 年。大空社、1995 年。
- 末木文美士「神を見る綱島梁川」、『明治思想化論』、トランスビュー、2004 年。

出 隆

- デカルト、出隆訳『デカルト・方法・省察・原理』、大村書店(哲学名著叢書)、大正 8(1919)年。
- 出 隆『哲学青年の手記』(『出隆著作集 6』)、勁草書房、昭和 35(1960)年。
- 出 隆『出隆自伝』(『出隆著作集 7』)、勁草書房、昭和 35(1960)年。
- 出 隆『続出隆自伝』(『出隆著作集 8』)、勁草書房、昭和 35(1960)年。

明治大正期におけるデカルトの紹介と研究

- アルフレット・フーイェー、中江兆民 訳『理学沿革史下』、文部省編輯局、明治 18(1885)年、50-186 頁。
- 井上円了『哲学要領. 前編』、哲学書院、明治 20(1887)年。第 42 節（度加多(デカート)氏学派）、85-88 頁。
- 大西祝『西洋哲学史』(東京専門学校文学科第 1 回第 2 年級講義録) 東京専門学校、519-565 頁。
- 大西祝『西洋哲学史 下』第 32，32 章、『大西博士全集. 第 3 巻』、警醒社明治 36-37(1903－1904)年、51-95 頁。
- ロージャース、藤井健治郎、北昤吉合譯『西洋哲學史』冨山房 、大正 4(1914)年、394－426 頁。
- 桑木厳翼『五大哲学者』、金尾文淵堂，大正 4(1914)年、56-106 頁。
- 桑木厳翼『日本哲学の黎明期 西周の『百一新論』と明治の哲学界』書肆心水、2008 年。
- ヘフデイング、 北昤吉訳『近世哲学史上巻』、早稲田大学出版部、大正 8(1918)年、274-335

頁。

- 太宰施門『仏蘭西文学史』、玄黄社、大正 7(1917)年、84-94 頁。
- 朝永三十郎『デカート』、岩波書店(哲人叢書 ; 第 1)、大正 14(1925)年。
- 三宅雄二郎『近世哲學史』(哲學舘第十二學年度高等宗教学科講義録)、哲學舘、1900 年、11-17 頁。
- キンデルバンド、桑木厳翼 解説『哲学史綱要』、東京専門学校出版部、1901 年、328-335 ; 339-354 頁。
- 出　隆『哲学青年の手記』(『出隆著作集 6』)、勁草書房、昭和 35(1960)年
- 出　隆『出隆自伝』(『出隆著作集 7』)、勁草書房、昭和 35(1960)年
- 大西祝『大西博士全集』 第 3, 4 巻　西洋哲学史　上下 、警醒社, 1904 年。
- 松本文三郎『近世哲学史』(哲学館第 7 学年度正科講義録) 哲学館、1894 年、20-29 頁。
- 波多野精一『西洋哲学史要』、大日本図書、1901 年、179-192 頁。
- 蟹江義丸『西洋哲学史』、博文館、1899 年、180-184 頁。
- 加藤玄智『問答体哲学小史』、右文社、1900 年、66-69 頁。
- 三宅雄二郎『哲学館講義録純正哲学』、哲学館、1888 年、7-10 頁。
- 松本文三郎『近世哲学史』、哲学館、1894 年、17-28 頁。
- ヘフディング、北昷吉訳『近世哲学史』、早稲田大学出版部、1917-1918 年、274-315 頁。
- フランク・シルリー、若守義孝訳『西洋哲学史 : 古代より現代まで』目黒書房、1916 年、351-376 頁。
- ヴィンデルバンド、村岡典嗣訳『ヴィンデルバンド近世哲学史第壱』、内田老鶴圃、1914 年、375-434 頁。

その他

- ハイネ氏,登張竹風（信一郎）訳述『独逸宗教哲学史』(名著綱要文学教育科 ; [6]) / (東京専門学校出版部, 1901)。
- 桑木厳翼、天野貞祐共著、イムマヌエル・カント『縮約　哲学序説』改版(東亜堂, 1920)、初版大正 3(1913)。
- 松本亦太郎・木村鷹太郎訳『プラトーン全集』 富山房 1903-1911（Benjamin Jowett の英訳 3 版による重訳)。

『世界哲学文庫』、冨山房、３冊

- 桑木厳翼『デカルト』、1904 年。
- 小林一郎著『プラトーン』、1906)年。

- 小林郁編『コムト』、(1909)年。

『哲学名著叢書』、大村書店、4 冊。

- 出隆『方法・省察・原理』(デカルト)、1919 年。
- 近藤哲雄『知識学序説及基礎』(フィヒテ)、1920 年。
- 善波達童『人知の原理及対話』(バークレー)、1920 年。
- 征矢野晃雄『黎明（アウローラ）』（ヤコブ・ベーメ）、1921 年。

『大村論文叢書』、大村書店、　18 冊。

- 1. 哲学とは何ぞや　ヴヰンデルバント 著；出隆 訳。
- 3. 宗教哲学の主要問題：現代宗教学に対するカント宗教論の意義に就ての研究　トレルチ 著；佐野勝也 訳。
- 4. 法律哲学　ラスク 著；恒藤恭 訳.
- 5. 芸術的活動の起源　フイドラア 著；金田廉 訳。
- 6. 論理学の原理　ウヰンデルバント 著；佐竹哲雄 訳。
- 7. 法律及法律學の本質　　シュタムラー著；中島愼一訳。
- 8. 美の原理　ヘンリー・マーシヤル 著；相良徳三 訳。
- 9. 新理想主義哲学序論　コーエン 著；児玉達童 訳。
- 10. 経済学の基礎概念　メンガー 著；山口正太郎 訳.
- 12. 倫理学の根本問題　ベルトランド・ラツセル 著；中込本治郎 訳。
- 13. 心理学概要　ナトルプ 著；城戸幡太郎 訳。
- 14. ゲエテの哲学とファウスト　ヴィンデルバント 著；高橋禎二 訳。
- 15. 体系的方法　ニコライ・ハルトマン 著；橘高倫一 訳。
- 16.文化科学方法論　ヘルマン・パウル 著；山口正太郎 訳。
- 17. カントの無上命法　ブッヘナウ 著；石塚錬慧 訳。
- 18. カントとゲエテ　ジムメル 著；谷川徹三 訳。
- 19. 規範学又は文化科学としての法律学：方法批判的研究　ハンス・ケルゼン 著；阿武京二郎 訳。
- 20. 自由の理念と国家の理念　カッシィラア 著；三土興三 訳。

哲学叢書、岩波書店。

- 1. 認識論 / 紀平正美著. -- 1915.10。
- 2. 最近の自然科學 / 田邊元著. -- 1915.11。
- 3. 哲學概論 / 宮本和吉著. -- 1916.2。
- 4. 論理学 / 速水滉著. -- 増訂版. -- 1923.12。
- 5. 西洋古代中世哲學史 / 安倍能成著. -- 1916.6。
- 6. 倫理學の根本問題 / 阿部次郎著. -- 1916.7。
- 7. 宗教哲學 / 石原謙著. – 1916。
- 8. 精神科学の基本問題 / 上野直昭著. -- 1916.10。
- 9. 美學 / 阿部次郎著. -- 1917.4 第 12 編 心理学 / 高橋穣著. -- 1917.7。
- 10. 西洋近世哲學史 / 安倍能成著. -- 1917.4。
- 11. 現代の哲学 / 高橋里美著. -- 1917.8。
- 12. 心理学 / 高橋穣著. -- 1917.7。

続哲学叢書、岩波書店。

- 第 1 編 歴史哲學 / 三木清著. -- 1932.4。
- 第 5 編 社會學 / 新明正道著. -- 1929.6。
- 第 8 編 宗教學 / 宇野圓空著. -- 1931.9。
- 第 9 編 教育学 / 長田新著. -- 1933.7。